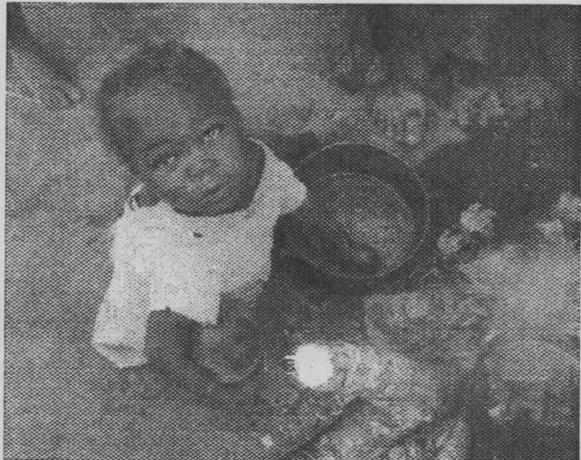


子どもたちはなぜ死んでいかなければならないのだろう ～フォトジャーナリストの見た世界～

小林裕幸氏 講演会



昨年8月、南アフリカのアンゴラに入った小林記者が現地で目にしたのは、27年間続いた内戦が終わった今も、子どもたちを襲う飢餓。荒廃しきった農地と援助活動をも阻む地雷原でした。

私たち応援団は、その現実を多くの人に伝えたいと願って、写真展に続いてこの講演会を企画しました。

——小林裕幸氏プロフィール——

朝日新聞記者。アンゴラを含めたアフリカの企画報道によって、東京写真記者協会の2002年度企画部門賞を受賞。掲載記事「援助空白地帯 死に行く子ら」(『アエラ』)など。

日 時：2003年2月22日（土）午後2時～4時（受付：午後1時半～）

場 所：パシフィコ横浜6階会議場（WFP日本事務所奥）

主 催：WFP応援団 後 援：WFP日本事務所、国連WFP協会

参加費：一般300円、会員100円（当日、受付にて）

申込：2月18日までに下記のいずれかの方法でお申し込みください。

Eメール：fancy_mura@hotmail.com 村上宛（講演会申し込みと明記）

郵送：横浜市中区桜木町1-1-56 横浜市市民活動支援センター

レターケースNo.8 WFP応援団

FAX：「レターケースNo.8 WFP応援団」と明記の上 045-223-2888へ

WFP応援団は国際連合世界食糧計画（WFP）の食糧援助活動を支援するボランティア団体です。

申し込み書

講演会「フォトジャーナリストの見た世界」への参加を申し込みます

氏名

住所

電話

Fax

Eメール

このチラシをどこで入手されましたか？

私がアンゴラを訪れたのは今年8月だった。27年にも及ぶ内戦に終止符をうつて4ヶ月、しかし私の見たアンゴラは、和平とはほど遠いものだった。

荒廃しきった農地、戦闘で亡くなった働き手。国際機関の行く手を地雷が阻み、援助の手が届かない地域が無数に広がる。「援助の空白地帯」では、飢餓が子どもたちを直撃する。食料も医療品もないまま、小さな命が連日のように失われていった。

写真を撮った直後に息を引き取った女の子。9人の子どものうち、8人を内戦で失った母親。そんな光景を前に、悲しみとも怒りともつかない感情で、胸が締め付けられた。

人々が失ったものや、背負った傷は、あまりにも重い。子どもたちや母親たちに笑顔が戻るのはまだ先のことなのだ。

取材にあたっては、WFPや国境なき医師団のスタッフの方たちに多大なサポートを頂いた。心からお礼を申し上げたい。

そして最後に、この写真展がアンゴラの現状を少しでも知ってもらうきっかけになれば幸いだと思う。

2002年12月 小林 裕幸

以上は、2002年12月24日から'03年1月13日まで開催された小林裕幸氏の報道写真展

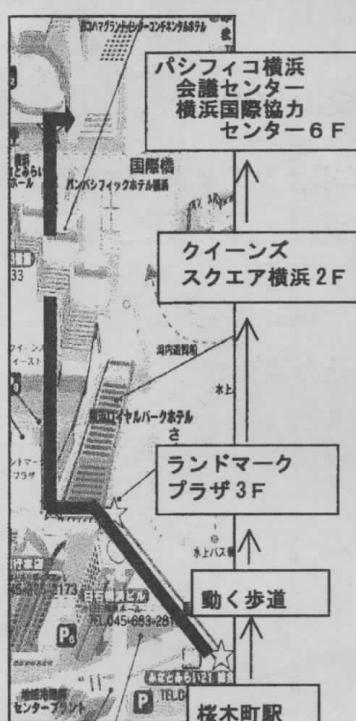
「戦渦の果てに アンゴラの子供たち」に寄せられた、小林裕幸氏からのメッセージです。

アンゴラの現状

1975年、ポルトガルから独立後に勃発した内戦は、2002年4月4日、停戦合意の署名がなされるまで、27年もの間続いていました。この間国内に敷設された地雷は400万個とも500万個とも言われ、インフラはことごとく破壊され、国土は荒れ、人々は散りぢりになり、数多くの孤児、寡婦を生み出しました。暴力と飢餓にさらされてきた数多くの、最も貧しい、最も弱い人々に援助の手を行き届かせるには、国際社会の、官民一体となつた大きな努力と、多額の資金を必要としています。

WFPとは

国連世界食糧計画(WFP)は飢餓撲滅を目的とした国連最大の食糧援助機関であり、また最大の人道援助機関です。1961年国連総会で設立され、イタリアのローマを本部としています。1996年、横浜のみなとみらい地区に日本事務所が設立されました。世界で8,000人に及ぶ職員が活動し、2001年には82カ国で7,700万人に食糧援助を行ないました。



講演会会場案内

場所：パシフィコ横浜会議センター、国際協力センター6F
横浜市西区みなとみらい1-1-1 パシフィコ横浜

交通：JR、東急東横線、横浜市営地下鉄、市営バス
・桜木町駅より ◇徒歩約12分(左図の通り)
◇市営バス(4)乗り場「パシフィコ横浜」行きで約7分
(130、131、140、141系統)
・横浜駅より ◇市営バス(17)乗り場「パシフィコ横浜」行きで約10分
(横浜駅東口そごう1階バスターミナル/141系統)

問合せ先：WFP応援団会員 村田 祈世子 Tel. Fax : 045-662-1318